

## ユニット2：テキストと物語 (ver 3.1)

### ねらい

このユニットでは、テキストと「物語」の関係について理解したのち、古典的インドの物語を伝える代表的なテキスト及びその形態を概観し、ガネーシャの物語を例として多様なテキストが伝える物語のバリエーションを検討する。

### 1. ナラティブ (叙述)、テキスト、ストーリー (物語)

- ナラティブ (narrative、叙述) :
  - ◇ 作者、語り手、聞き手、テキスト、コンテキスト (社会的文脈)、ストーリー (物語)
- ストーリー (story、物語) :
  - ◇ 時空間 (time-space)、人物 (character)、行為 (act)、出来事 (event)
  - ◇ 時空間としての四つのユガおよびメール山を中心とした世界
- テキスト (text) :
  - ◇ 口承、書承、視覚表象 (イメージ)

### 2. 古典インドのテキスト

- ◇ シュルティ (天啓) : ヴェーダ
- ◇ スムルティ (記憶) : ラーマヤナ、マハーバーラタ、プラーナなど
  - ラーマヤナ (Rāmāyaṇa) : 「ラーマの行程」の意。古典サンスクリットの叙事詩。全7編、2万4000頌。「最初の詩人」と称される聖仙 (リシ) ヴァールミーキの作とされる。第1編と第7編は後代の追加。3世紀頃に現存の形が完成した。実際には、規範とされるヴァールミーキによるテキスト以外にもラーマの事跡を語る様々なテキストが存在する。
  - マハーバーラタ (Mahābhārata) : 「大いなるバラタ族 (の物語)」の意。古典サンスクリットの叙事詩。全18巻、10万頌。聖仙ヴィヤーサが5人の弟子に伝え、その1人がジャナメージャヤ王の催した蛇退治の祭祀において初めて唱えたとされる。前10世紀頃のバラタ族内の領土紛争を吟遊詩人たちが伝える口承物語を核に、さまざまな要素を取り込んで増広し、後5世紀頃に現在の形に近づいた。
  - プラーナ (Purāṇa) : 「古い (物語)」の意。サンスクリット、韻律詩 (16音節2行のシュローカ体)。伝説上の聖仙ヴィヤーサの作とされるが、その起源は、バラモン教時代に伝えられた神話・伝説・説話に由来する。その原型は、バラモン教からヒンドゥー教への転換期における社会の変化を反映している (寺廟の創設、低身分の僧職者集団の出現など)。4世紀から14世紀の間に現存の諸プラーナの形が完成した。大プラーナとして以下の18が挙げられる。
    - 「ブラフマ・プラーナ (以下略)」、「パドマ」、「ヴィシュヌ」、「ヴァーユ」、「バーガヴァタ」、「ナーラダ」、「マールカンデーヤ」、「アグニ」、「バヴィシュユヤ」、「ブラフマヴァイヴァルタ」、「リング」、「ヴァラーハ」、「スカンダ」、「ヴァーマナ」、「クールマ」、「マツヤ」、「ガルダ」、「ブラフマーンダ」。
 神々の神話、伝説、賛歌、祭式、巡礼地の縁起、祖霊祭、神殿・神像の建立法、カースト制度、四住期の義務、哲学思想、医学、音楽など多様な内容。
    - ◇ テキストの歴史的伝承と変化 : 物語の整理・統合・変形・派生

#### 4. 古典インドの物語を伝える東南アジアのテキストとその形態

- テキストの形態：
  - ◇ 翻訳テキスト、翻案テキスト
  - ◇ 言語：書承（貝葉）、口承
  - ◇ 視覚表象：浮き彫り、演劇・芸能（語りと身体）
- インド世界と東南アジア世界を結びつける「物語」的仕掛け
  - ◇ 「転生」、「予言」（言葉の力：呪い、誓約）

#### 5. 物語とテキストの錯綜した関係：ガネーシャの物語を例に

- ガネーシャ (Ganeśa)：「ガナ（下級神の群れ）の主」の意。「ガナパティ」とも呼ばれる。シヴァ神と后パールヴァティー（ウマー）の子とされる。人身象面。片方の牙を欠くことから「エーカダント」（一つの牙を持つ者）とも呼ばれる。障害を取り除く。ネズミが乗獣。『ラーマーヤナ』や『マハーバーラタ』では活躍せず、6世紀前後に信仰が始まった比較的、新しい神。後代、ヒンドゥー教においてガネーシャ信仰が広まり、密教においても大聖歓喜自在天（聖天、歓喜天）として取り込まれた。
- ガネーシャの誕生 1：シヴァ神が山で修行中にパールヴァティーは自分の垢からガネーシャを生み出す。沐浴中のパールヴァティーは「息子」に人の出入りを禁じる。帰還したシヴァは家に入ろうとするが妨害されて怒り、息子と知らずに首を切り落とす。息子の命を救うために、最初に見つけた生き物（象）の頭を切り取り、胴体につけて復活させる（パドマ・ブラーナ）。
- ガネーシャの誕生 2：シヴァ神の後ウマーがシヴァ神の子を身ごもっていたとき、神々がインドラ神の象（アイラーヴァタ）を連れて訪問する。ウマーは象を見て驚愕する。やがて生まれた息子は象の頭を持っている。シヴァ神は彼をガナ神と名付ける（12世紀頃の古ジャワ語『スマラダハナ』）。
- ガネーシャの折れた牙：パラシュラーマがシヴァを訪問する。休息中のシヴァを妨げないようガネーシャは入場を拒絶し、怒ったパラシュラーマと戦いとなる。パラシュラーマが投げた（シヴァ神から与えられた）斧をガネーシャは牙で受け止める（牙は折れる）（パドマ・ブラーナ）。
- マハーバーラタの筆記者としてのガネーシャ：ヴィヤーサは『マハーバーラタ』を想起したとき、ガネーシャにテキストを口述筆記させる。その際、ガネーシャは、一瞬たりとも筆を置く間を作らないことを条件として、それに対して、ヴィヤーサは、語られたすべての語句を理解することなく書き留めないことを条件とした（マハーバーラタ）。

#### 参考文献：今回の講義のテーマに関わるもの

1. 青山 亨。「叙事詩，年代記，予言：古典ジャワ文学にみられる伝統的歴史観」、『東南アジア研究』32(1):34-65. 1994.
2. 上村勝彦。『インド神話—マハーバーラタの神々』（ちくま学芸文庫）筑摩書房。2003.  
1. は東南アジアのテキストとインドの「物語」の結びつけ方を分析。2. はインド神話についての信頼できる入門書。以下は事典類：
3. 辛島昇・他編。『南アジアを知る事典』平凡社。1992.
4. Dowson, John. *A Classical Dictionary of Hindu Mythology and Religion: Geography, History and Literature*. Org. 1894. New Delhi: D.K. Printworld. 1998.
5. Zoetmulder, P.J. *Kalangwan: A Survey of Old Javanese Literature*. The Hague: Martinus Nijhoff. 1974.

### ユニット3：ラーマヤナの主要登場人物の紹介とあらすじ (ver 1.4)

#### 概要

ラーマヤナ Rāmāyaṇa. Rāma+ayana 「ラーマ王子の行程」の意。ヴァールミーキ作とされるサンスクリット語全7編(2万4千詩節)が標準的なテキストとされるが、インド・東南アジアに無数のテキストが存在する。原型は前2世紀頃に成立、2世紀頃に現在の形が完成。ラーマをヴィシュヌ神の転生とする設定や第7編は後期に付加されたと推測されている。

物語(ストーリー)はトレター・ユガの時代に設定されている。ラーマ王子はヴィシュヌ神の7番めの転生とされる。パラシュラーマは同じく6番目の転生。ラーマの昇天をもってトレター・ユガが終わり、ドヴァーパラ・ユガが始まる。ラーマはアヨーディヤーを王都とするコーサラ王国の王子。「太陽族」の家系。

物語は、ヴァールミーキ仙がラーマの二人の息子たちに父ラーマの事績として詠って聞かせたものを、息子たちが記憶し、ラーマ王の前で詠唱したものであると第7編の中で説明。

#### 登場人物(登場順と血縁関係による。読みはサンスクリットによる。)

ダシャラタ Daśaratha	コーサラ国の王。ラーマの父。
ラーマ Rāma	コーサラ国の王子。ダシャラタ王とその第1カウサリヤーの息子。
バラタ Bharata	ラーマの弟。第2王妃カイケーイー妃の息子。
ラクシュマナ Lakṣmaṇa	ラーマの弟。第3王妃スミトラー妃の息子。シャトルグナと双子。
シャトルグナ Śatrughna	ラーマの弟。第3王妃スミトラー妃の息子。ラクシュマナと双子。
ヴィシュヴァーミトラ Viśvāmitra	聖仙(ルシ)。ラーマの師。
ジャナカ王 Janaka	ヴィデーハ国の王。シーターの父。
シーター Sītā	ヴィデーハ国の王女。ジャナカ王の娘。
パラシュラーマ	「斧を持ったラーマ」の意。クシャトリヤに復讐するバラモン戦士。
ラーヴァナ Rāvaṇa	ランカー島(スリランカ)の羅刹(Rakṣas)の王。十面二十臂。別名ダシャムカ(Daśamukha 十の顔)ダシャカナンタ(Daśakanṭha 十の首)
シュールパナカー Śūrpanakhā	ラーヴァナの妹。羅刹。
ヴィビーシャナ Vibhīṣana	ラーヴァナの弟。羅刹
クンバカルナ Kumbhakarna	ラーヴァナの弟。羅刹。
インドラジット Indrajit	ラーヴァナの息子。羅刹。
ヴァーリン Vālin	キシユキンダーの猿の王。スグリーヴァの兄。
スグリーヴァ Sugrīva	ヴァーリンの弟。
ハヌマーン Hanumān	スグリーヴァの配下の猿の大將。
ヴァールミーキ Vālmīki	仙人。『ラーマヤナ』の作者。
クシャ Kuśa	ラーマとシーターの息子。ラヴァと双子。
ラヴァ Lava	ラーマとシーターの息子。クシャと双子。
ジャターユス Jatāyus	秃鷹。ジャナカ王の友。
アグニ Agni	火神。

#### あらすじ

##### 第1編「少年の巻」

コーサラ国王ダシャラタはヴィシュヌ神の化身であるラーマなど4人の王子を得た(カウサリヤー妃からラーマ、カイケーイー妃からバラタ、スミトラー妃からラクシュマナとシャトルグナ)。ヴィシュヴァーミトラ仙の薫陶を受けたラーマは、ジャナカ王の宮廷で開かれた婿選びの競技で優勝し、王女シーターと結婚する。ラーマはパラシュラーマを打ち負かす。

##### 第2編「アヨーディヤーの巻」

ダシャラタ王はラーマに王位を譲ろうとするが、カイケーイー妃の干渉にあつて、バラタを王位につけること、ラーマを14年間森に追放することを余儀なくされる。ラーマは父の命にしたがい、シーター妃とラクシュマナに伴われてアヨーディヤーの都を出るが、残された王は悲しみの余り絶命する。バラタはラーマを引き戻そうとするが拒絶され、ラーマから譲り受けた履き物を王座に置いてラーマの代理として統治する。

## 第3編「森林の巻」

ラーマたちは行者たちを邪魔する羅刹たちの退治に活躍する。シュールパナカーはラーマに懸想して拒絶されラクシュマナからは侮辱を受ける。彼女は復讐のため兄ラーヴァナにシーターをさらって妻にするようそそのかす。小鹿を使った奸計でシーターを誘拐したラーヴァナは、シーターを救おうとしたジャターユスを倒し、ランカー島に帰還する。失踪したシーターを探すラーマたちはキシュキンダーでスグリーヴァとその家来の猿たちに出会う。

## 第4編「キシュキンダーの巻」

ラーマはスグリーヴァが兄ヴァーリンから王国と妻を取り戻すのを手伝い、代わりにスグリーヴァの部下たちにシーター探索の援助をうける。ハヌマーンはランカー島にシーターが誘拐されたことを突き止める。

## 第5編「美麗の巻」

ハヌマーンは海を飛び越えてランカー島へ渡り、シーターと接触し、ラーマの指輪を渡して救出が近いことを知らせる。ハヌマーンは羅刹たちに捕まるが、ラーヴァナの宮廷を火の海にしてラーマのもとに帰還する。

## 第6編「戦闘の巻」

ラーマたちは猿たちの力によって海に橋を架けてランカー島に攻め込む。ヴィビーシャナは兄を諫めるが聞き入れられず、ラーマに協力する。激しい戦いの末、ラーマはラーヴァナを倒し、ヴィビーシャナを王位につける。ラーマに貞操を疑われたシーターは火の中に身を投じるが、火神アグニが現れてシーターの潔白を証明する。一行はアヨーディヤへ凱旋し、ラーマは王位につく。

## 第7編「最後の巻」

国民の間にシーターの貞操を疑う声が生じ、ラーマはシーターを森に追放する。シーターはヴァールミーキ仙の庵に滞在し、クシャとラヴァの双子を産む。ヴァールミーキ仙は二人に『ラーマーヤナ』を語って聞かせる。二人が物語を朗詠するのを聞いたラーマは、シーターに身の潔白を証明するよう求める。シーターが大地の女神を呼び出すと、女神はシーターを抱いて地中に消える。嘆き悲しむラーマは王位をクシャとラヴァに譲り、天界に昇ってヴィシュヌ神に戻った。

## 参考文献

- 青山亨 1994 「ラーマ、ラーヴァナ、ハヌマーン—ポリフォニーとしての叙事詩とその英雄たち」『しにか』1月号. 5(1): 62-67.
- 青山亨 1998 「インドネシアにおけるラーマ物語の受容と伝承」『ラーマーヤナの宇宙：伝承と民族造形』金子量重・坂田貞二・鈴木正崇・編. 春秋社.
- 青山亨 2014 「プランバナン寺院シヴァ堂のラーマーヤナ浮彫」『画像史料論』東京外国語大学出版会.
- 阿部知二・訳 1966 『ヴァールミーキ ラーマーヤナ』(世界文学全集 III-2) 東京：河出書房.
- 石井米雄・他編 1991 『インドネシアの事典』京都：同朋舎. とくに「ジャワ文学」「ラマ」「ラマヤナ」「ラワナ」「ワヤン」の項目.
- 岩本裕 1980 『ラーマーヤナ』第1巻. 東京：平凡社. とくに解題.
- 岩本裕 1985 『ラーマーヤナ』第2巻. 東京：平凡社. とくに解題.
- 河田清史 1971 『ラーマーヤナ』(レグルス文庫) 全2巻. 東京：第三文明社.
- 中村了昭 2012-2013 『新訳 ラーマーヤナ』全7巻. 東京：平凡社.
- 松本亮 1982 『ワヤン人形図鑑』東京：めこん.
- 松本亮 1993 『ラーマーヤナの夕映え』東京：八幡山書房.
- 松本亮 1994 『ワヤンを楽しむ』東京：めこん.



ジャワのワヤン人形：左からラーマ、ハヌマーン、ラーヴァナ、シーター。

## ラーマヤナ登場人物の名前(サンスクリット・ジャワ語・タイ語対照表) (ver 3.1\_2011-11-01)

サンスクリット	説明	現代ジャワ語	現代タイ語
ダシャラタ Daśaratha	コーサラ国の王. ラーマの父.	ドソロト Dasarata	トッサロット Tosaroth.
ラーマ Rāma	コーサラ国の王子. ダシャラタ王とその第1王妃カウサリヤーの息子.	ロモ Rama. 王妃スコサルヨの息子. 別名ルゴウォ Regawa	ラーム Ram.
バラタ Bharata	ラーマの弟. 第2王妃カイケーイー妃の息子.	バロト Barata. 王妃ケカイの息子.	プロット Phrot.
ラクシュマナ Lakṣmaṇa	ラーマの弟. 第3王妃スミトラー妃の息子. シャトルグナと双子.	レスモノ Lesmana. 王妃スミトロの息子.	ラック Lak.
シャトルグナ Śatrughna	ラーマの弟. 第3王妃スミトラー妃の息子. ラクシュマナと双子.	サトルグノ. 王妃スミトロの息子.	サッタールト Satrud.
ヴィシュヴァーミトラ Viśvāmitra	聖仙 (ルシ). ラーマの師.		ルーシーサラパン.
ジャナカ Janaka	ヴィデーハ国の王. シーターの父.	ジャノコ Janaka	チャノック Chanok.
シーター Sītā	ヴィデーハ国の王女. ジャナカ王の娘.	シント Sinta. 別名シト.	シーダー Sida.
ラーヴァナ Rāvaṇa	ランカー島 (スリランカ) の羅刹の王. 十面二十臂. 別名ダシャムカ (Daśamukha 十の顔) ダシャカント (Daśakanṭha 十の首)	ラウォノ Rahwana. アルンコの王. 別名ドソムコ Dasamuka.	トッサカン Tosakanth. ロンカーの王.
シュールパナカー Śūrpanakhā	ラーヴァナの妹. 羅刹.	サルポクノコ Sarpakenaka.	サムマナッカー Samanakha.
ヴィビーシャナ Vibhīṣana	ラーヴァナの弟. 羅刹	ウィビソノ Wibisana.	ピペーク Pipek.
クンバカルナ Kumbhakarna	ラーヴァナの弟. 羅刹.	クムボカルノ Kumbakarna.	クムパカン Kumpakan.
インドラジット Indrajit	ラーヴァナの息子. 羅刹.	インドラジット Indrajit.	インタラチット Intarachit.
ヴァーリン Vālin	キシュキンダーの猿の王. スグリーヴァの兄.	スバリ Subali.	パーリー Pali.
スグリーヴァ Sugrīva	ヴァーリンの弟.	スグリウォ Sugriwa.	スクリープ Sukrib.
ハヌマーン Hanumān	スグリーヴァの配下の猿の大將.	アノマン Anoman.	ハヌマーン Hanuman.
ヴァールミーキ Vālmīki	仙人. 『ラーマヤナ』の作者.		ワッチャマルキー.
クシャ Kuśa	ラーマとシーターの息子. ラヴァと双子.	クソ.	モンクット Mongkut.
ラヴァ Lava	ラーマとシーターの息子. クシャと双子.	ロウォ.	ロップ Lop.
ジャターユス Jatāyus	禿鷹. ジャナカ王の友.	ジャタユ Jatayu.	サダーユ Sadayu.
アグニ Agni	火神.	ブロモ Brama (=ブラフマー神).	プロム Phrom.

松本亮 1982 『ワヤン人形図鑑』東京: めこん.

Meechai Thongthep. 1993. *Ramakien: The Thai Ramayana*. Bangkok: Naga Books.

R. Rio Sudibyo-prono. 1991. *Ensiklopedi Wayang Purwa*. Jakarta: Balai Pustaka.

「ラーマキエンの物語」 <http://www.itdaschool.jp/ramakien2.htm> [accessed 2007-10-28].

Wikipedia: Ramakien. <http://en.wikipedia.org/wiki/Ramakien> [accessed 2009-10-29].